

逞筆模試

■第一回

一月二十九日

(一) 次の傍線部分の読みをひらが

なで記せ。①～⑩は音読み、⑪～⑳は訓読みである。

(30)
1×30

- ① 椒花落つる時瘴煙起こる。
- ② 粹にして王なり、駭にして覇たり。
- ③ 絶対的支配権を僭有している。
- ④ 胸中に快快として霽れやらぬものあり。
- ⑤ 俊又至りて多く、者碩威くあり。
- ⑥ 子、迪哲をもつて政を称える。
- ⑦ 方丈の草堂は法界を呑んで藪芥なり。
- ⑧ 古い茗讖図録の鈔本。
- ⑨ 人は鯢桓の審を知らず。
- ⑩ 下衆無い上臈は成らず。
- ⑪ 吾に布衣の心あり、子に衮冕の志あり。
- ⑫ 慈父は悪子を棄て、明君は佞臣を捨つ。
- ⑬ 蒼焉として、その耦を喪るるに似たり。
- ⑭ 膠のごとく粘稠化する。
- ⑮ 塵虫禪窟に入る。
- ⑯ 短簫簫吹功ある諸侯に賜う。
- ⑰ 一の騏驎は千の驟驢を凌ぐ。
- ⑱ 黄金鞞尾に塗り、白玉鈎膺に飾る。
- ⑳ 眉に皺皺を成して咤叱せり。
- ㉑ 既に禍祖を去り、これ懐いこれ顧みる。
- ㉒ 難に臨んで遽かに兵を鑄る。
- ㉓ 黎庶嶺がり立錐の地もなし。
- ㉔ 政局に艱み酒色を縦にする。
- ㉕ 陰險に局せられ、禍難身に薄る。
- ㉖ 処するに先蹤を倣いて疎かなし。
- ㉗ 轟く研られたる石にも神の定めたる運あり。
- ㉘ 糧を贏してこれに趣く。
- ㉙ 衆介皆命を逆えて辞せず。
- ㉚ 鋭く撓められた竹の櫛先。
- ㉛ 栗の毬で総立ち。

解答難度指数 1.73

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。㉜、㉝は国字で答えること。

(40)
2×20

- ① 誇りに織毫のツウヨウも感ぜず。
- ② 感冒にカカリ牀褥に静養する。
- ③ 連夜の葎にスダク虫の音。
- ④ 夕立で道がヌカっている。
- ⑤ 靈験あらたかな山河をパシヨウする。
- ⑥ 依然としてサンスクみの状態である。
- ⑦ 切歯扼腕してフクシユウを誓う。
- ⑧ サイの河原の石を積む。
- ⑨ 紅白キカクの勢をなす。
- ⑩ 八百屋の蔬菜をヒンシツする。
- ⑪ 身にランルを纏い、風采は瀟洒を欠く。
- ⑫ 患部を矯めつスガめつ診ている。
- ⑬ 一朝にしてカイジンに帰す。
- ⑭ コメツき飛蝗のようなお辞儀。
- ⑮ 驍名を遠近トビに馳せる。
- ⑯ 積年の忿りがトビに蟠屈する。
- ⑰ 晴れやかにコウシヨウして空を仰ぐ。
- ⑱ 砲兵コウシヨウ跡地を訪れる。
- ⑲ アンコウの待ち食い。
- ⑳ 二時間かかってヤハを張り終える。

(三) 次の1～5の意味を的確に表す語を、次の□から選び、漢字で記せ。(10)
2×5

- ① 物事がひとところに集中すること。
- ② 祭事や神事のあとで催されるうたげ。
- ③ 人をふるえあがらせること。
- ④ 意地っぱりで人に従わないこと。
- ⑤ 船舶を高低差の大きな水面で昇降させる門。

きようえん・ごうふく
しようきよう・しんかん
すいこう・ふくそう・らくえき

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1
次の四字熟語の(①～⑩)に入る適切な語を次の□から選び漢字二字で記せ。(20)
2×10

- | | | |
|--------|----|-----|
| (①) 子弟 | 孤寡 | (⑥) |
| (②) 空谷 | 枯魚 | (⑦) |
| (③) 切磋 | 昏定 | (⑧) |
| (④) 高会 | 桃李 | (⑨) |
| (⑤) 枕流 | 竜頭 | (⑩) |

かんさく・きようおん
げきしゆ・こうりよう
しれい・しんせい・せいけい
そうせき・ちしゆ・ふこく

問2
次の①～⑤の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)
2×5

- ① 民衆を惑わす作為を施すこと。
- ② 至上の贅沢を尽くすたとえ。
- ③ 口八丁。
- ④ 優秀な者も無用の材となれば捨てられる。
- ⑤ 老人と子供。

喙長三尺・篝火狐鳴・金塊珠璣
衆口鑠金・狡兔良狗・黄髮垂髫
草園風従・泣斬馬謖

(五) 熟字訓・当て字の読みを記せ。

- | | | |
|-------|-------|------|
| ① 舎人 | ⑥ 柳葉魚 | (10) |
| ② 鶺鴒 | ⑦ 怕痒樹 | 1×10 |
| ③ 小檠 | ⑧ 啄木鳥 | |
| ④ 海蘿 | ⑨ 泥胡菜 | |
| ⑤ 繡眼児 | ⑩ 告天子 | |

(七) 次の①～⑤の対義語、⑥～⑩の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

- | | |
|------|------|
| ① 怡然 | ⑥ 撩乱 |
| ② 中原 | ⑦ 祇候 |
| ③ 顕達 | ⑧ 綽号 |
| ④ 披瀝 | ⑨ 爺嬢 |
| ⑤ 菲才 | ⑩ 尋承 |

(20) 2×10

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分で漢字で記せ。

- ① **ボウシ**背に在り。
 ② 鶴の**ハギ**も切るべからず。
 ③ 狐裘にして**コウシユウ**す。
 ④ **キョツコウ**の楽しみ。
 ⑤ **レイコウ**を食らう者は大宰の滋味を知らず。
 ⑥ **クンユウ**は器を同じくせず。
 ⑦ **レイスイ**の交わり。
 ⑧ 巧言**コウ**の如し、顔之厚し。
 ⑨ 凱風南よりして彼の**キョクシン**を吹く。
 ⑩ 書を読みて聖賢を見ざれば、**エンザン**の備と為る。

(20) 2×10

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送りがないに注意して)ひらがなで記せ。

- ア ① 謳頌…② 頌える
 イ ③ 鬯浹…④ 鬯びる
 ウ ⑤ 晒歎…⑥ 晒う
 エ ⑦ 歛肩…⑧ 歛める
 オ ⑨ 踵武…⑩ 踵ぐ

(10) 1×10

(九) 文章中の傍線(1.～10.)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(30) 2×10 1×10

A 二十二年春、建文帝東行したまい、冬十月史彬と旅店に相遇う。此歳阿魯台大同に**ア**寇す。去年阿魯台を親征し、阿魯台**イ**廻れて戦わず、師空しく還る。今又塞を犯す。永楽帝また親征す。敵に遇わずして、軍食足らざるに至る。帰路榆木川に次し、急に病みて崩す。**レケ**ケし疑う可きある也。永楽帝既に崩じ、建文帝猶在り、帝と史彬と客舎相遇い、老実貞良の忠臣の口より、**ウ**寡国奪位の叔父の死を聞く。世事測る可からずと雖も、**ニチハツ**して宮を脱し、墮涙して舟に上るの時、いづくぞ茅店の茶後に深仇の冥土に入るを談ずるの今日あるを思わんや。あゝ亦奇なりというべし。知らず応文禪師の如何の感を為せるを。即ち彬と、もに江南に下り彬の家に至り、やがて天台山に登りたもう。

(幸田露伴「運命」より)

B 「——さるにこの謙信が、何故信玄と長年戦つて来たかと申せば、元來、謙信には謙信の信条があつてのことです。自分、年二十三にして、初めて、国内平定の業一まず備わり、微勲天聴に達するところとなり、畏くも、叙位任官の優寵を賜う。——微賤、遠くに**エ**坐ら、またひとたびの**チヨウキン**もせず、さきに**ユウアク**なる天恩に接す。勿体なきことの極みと、すなわち翌年、万難を排し、上洛して、**ケツカ**に伏し、親しく**オ**咫尺を拝し、また天盃を降しおかる。…中略…わが生涯は**ミハシ**の一門を守りて捨てん。悔いはあらじと、深く深く心に誓うて退京いたしました。」

(吉川英治「上杉謙信」より)

C 日本の歴史は少年のころよりわたくしに対しては隠棲といい、**タイエイ**と称するが如き消極的処世の道を受けた。源平時代の**シシヨウ**と伝奇とは平氏の運命の美なること落花の如くなることを知らしめた。『太平記』の**カ**編讀は藤原藤房の生涯について景仰の念を起させたに過ぎない。わたくしはそもそもかくの如き觀念をいずこから学び得たのであろうか。その由つて来るところを尋ねる時、少年のころ親しく見聞した社会一般の情勢を回顧しなければならぬ。即ち明治十年から二十二、三年に至る間の世のありさまである。この時代にあつて、社会の上層に立っていたものは官吏である。官吏の中その勲功を誇つていたものは薩長の士族である。薩長の士族に随従することを**キ**層しとしなかつたものは、悉く失意の淵に沈んだ。失意の人々の中には、**トウコ**の筆を振つて、**ハイセツ**の辱めに会うものもあり、また淵明の態度を学んで、**ク**東籬に菊を見る道を求めたものもあつた。わたくしが人より教えられざるに、**ケ**夙く学生のころから『帰去来の賦』を誦し、また『楚辞』をよまむことを**コ**冀つたのは、明治時代の裏面を流れていた或思潮の為すところであらう。

(永井荷風「西瓜」より)